

井伏鱒二論

—その初期—

坂 根 俊 英

井伏鱒二の最初の短篇集『夜ふけと梅の花』は「新興芸術派叢書」の一冊として昭和五年四月三日に新潮社から発行された。初版本の最後の頁には「新興芸術派叢書」の広告が載っていて、佐々木俊郎、龍崎寺雄、久野豊彦、川端康成、樽崎勲、横光利一、嘉村磯多、岡田三郎、浅原六朗の書名が並べられ、「以下続々刊行」と書かれている。

『夜ふけと梅の花』は十六篇の短篇を収録し、「朽助のゐる谷間」はその巻頭におかれている。その配列は必ずしも製作年代順とはいえない。

「朽助のゐる谷間」は昭和四年三月の「創作月刊」に発表された。その中には次のような文章が見える。

△こんな追憶めいた記録——これはすでに二十年以前のことなのである。そして今は最早、私は東京に住んで不遇な文学青年の暮しをしてゐる。それ故、私は朽助に対して現在の私が何ういふ職業を営んでゐるかをさへも、明らかに彼には告げてゐないのである。この事は彼の最も不平とするところであるらしい。▽

「文学青年の暮し」というものが郷里の朽助に対して言うを憚るものであるのは「私」が今「不遇」であるからだけではあるまい。

それは朽助を代表とする郷里の価値感に抵触し、「私」の中にその抵触を無視するほどの自信がないからである。

初期の井伏はこの「私」のように「文学」東京と「郷里」非文学の間で迷い動揺する存在であったと思われる。それは一つには「不遇」、まだ文学的足場が固まっていないうちからくる文学への懐疑感に発していた。けれどもまたもう一つの要素として彼の場合、その郷里からの牽引力があまりにも強いことをあげなければならぬ。

郷里の人々の考え方は彼に反撥を起させざるよりはむしろ親和的に働きかけるものであり、それらを振り切つて文学に向かうことは彼の中で二律背反の悩みを与えることであつた。

いわゆる文学修業ということの井伏独特の意味はそこにある。郷里に反逆し、

文学に新しい価値感を求めていった文学者たちと彼は異なる。彼は己れの内なる郷里に魅かれながらそれを否定し、文学を見失わないようにしなければならぬ。郷里に反逆した文学者たちは生活が貧窮しても文学に背水の陣をしくことができた。文学を神聖視し、それに殉教する悲壮感が生きる支えとなる。倒立した反英雄として自己を意識することになる。井伏の場合、郷里や世間との対立関係がないだけに、そのような悲壮感や英雄意識は生れようがない。

井伏は「郷里」非文学に誘惑される自己と戦いながら文学を確立せねばならなかつた。「山の図に寄せる」という詩はそのような心の葛藤をよく表わしている。

△何でもないやうなこの山々
これがわが修業の邪魔をする
望郷の念といふを起させる
これではいけないと思ふのに
どうにもならないわが心▽

郷里からの牽引はここではその山河の姿、自然を通してやってきた。「寒夜母を思ふ」では肉親の姿を通して誘いをかけてくる。

△母者は手紙で申さるる

お前の瘦せ我慢は無駄ごた
小説など何の益にか相成るや
田舎に帰れよと申さるる▽

母の「山を愛せ」「土地をば愛せ」「祖先を崇めよ」という私への言葉に井伏が根柢を揺すぶられるような気持ちがあったことは推察に難くない。しかし、それでも彼は「詩を書く瘦せ我慢」を続けた。

東京に出た彼がそんな迷いを抱えながら心情的に孤独と鬱屈に閉ざされなかつたはずはない。初期の彼を包んだ屈託した精神はさまざまに作品に顕われる。

「山椒魚」はその中でも見事に自己を客観化し得ている点においてその作品世

界全体が象徴の高みに達している作品である。岩屋に閉じこめられて出口なしの状況にあるその姿は作者の姿であるとともにその時代におかれた人間の姿でもあり、普遍的な人間の姿でもある。しかし、例えば次の一節、

△彼は目を閉じてみた。悲しかった。彼は彼自身のことを譬へばブリキの切屑であると思つたのである。▽

という自己認識はやはり当時の井伏の心情に即して読む時、最も切実に訴えてくる。

△「ああ寒いほど独りぼつちだ」▽という嗟嘆とともに、ここにみられる自己認識は己れを世界にとって無用の存在とみる意識である。それは郷里叛逆型文学者の自己聖化と対照的である。「埋憂記」における「私」は次のように思う。

△少し感傷的になつた夜更けなどには、譬へば自分は最早雨ざらしの喇叭だと思ひ込んだ。けれどもなるべく自分自身に対して礼儀を失ひたくなかつたので、私は雨ざらしの喇叭などではないと信じようとした。▽

ここにおける「私」は無用意識と有用意識の間で揺れているともいえる。さらにそこで揺れる自分の意識を「感傷」として超克しようとする意識もある。「感傷」と「文学」を結びつけまいとする警戒心の上にもその醒めたといわれる井伏の目は誕生している。井伏のいわゆる醒めた認識力は彼が「感傷」をまったくもたないところから出てくるのではなく、自己の内なる「感傷」を強力に排除しようとする知性の力業にも似た作用によって生まれる。その「感傷」に対する敵しい警戒心は例えば「恋愛」に対しても過度に向けられてゆく。

△恋愛とは、人間の胸のなかに発生した鼻茸にすぎない。いつのまにか消えてなくなつたり、いつまでも消えなかつたりして、われわれを個人的な人間にしてしまふ。▽（「ジョセフと女子学生」）

こうした「感傷」の超克の上に立っていかかに「憂鬱」を表現化するかに初期の井伏の苦心は向けられた。その方法の一つは「人々は思ひぞ屈した場合、部屋のなかを騒々こんな具合に歩きまはるものである。」（「山椒魚」）というように個人的心情を一般化して提示する仕方である。また「屈託」と対照的な情景の描出によって「屈託」を照射する方法もとられる。

△玩具が私のくつたくした気持とは全く反対に勢ひよく水面に浮んで来ると、彼等は朗かなよろこびの叫びをあげて、浮巢の中に再びそれをさめた。私達はこの遊戯をくり返した。そして私は心の中で強ひて思はうとしてゐた——夜逃げなんか俺は平気で出来るぞ▽（「埋憂記」）

ここでの「私」は湯屋に出かけ、湯槽の中の子供二人が玩具の脚を引張って湯の中に沈める遊びをしているのに加わっている。しかし「私」の心は下宿代を払えず立退きを要求されていることで「夜と同じ暗さ」に閉ざされているのである。

井伏の「憂鬱」と「暗さ」はこの時期、物質条件の上では貧窮生活から来ている。その事情は「岬の風景」の冒頭に示されている。

△学生生活を止して以来まる三年間、私は学生時代と少しも交らない様式の生活を送つた。それなのに何かかわらず、私の父兄達は、私を為すことのない人間のやうに取扱つて、私に生活費を与へなくなつたのみでなく、彼等の嫉かたが悪かつたのであると彼等自身あからさまに私の面前で後悔したり悲しんだりした。何となれば今は最早、私は学生でもなく且つ勤め人でもなかつたからである。彼等は度々私を説き伏せて、荒物屋かそれとも燈台守にならせようとした。私はその度毎に彼等の説に反対しさへすればよいと思つてゐた。そして毎日憂鬱であつたのだ。▽

「憂鬱」なのは肉親の説への反対の根拠が自分にも把握できていないからであり、それは「えたいのしれない魔物」としかいいようがない「文学」の鬼が自分の中に住みついていいるからである。「埋憂記」では文学という「魔物」の存在が次のように述べられる。

△考へるなどといふことは何もしないといふことと同じことだ。けれどえたいのしれない魔物が僕を考へてしまつたのだ。僕に読書をさせたのだ。その結果、僕はただ思ひぞ屈したのである。▽

ここにおいては知識人生活それ自体の性格の中に「鬱屈」をみて疑問を提示しているが、このように述べて帰郷するこの小説の在竹はまた「田舎へ行くことは気持の上からいへば自殺するのと同じこと」という意識をもっていた。残された井伏が作家として留まる道はその「鬱屈」自体を対象化し、普遍化することではなかつた。「鬱屈」に拘泥することはいい代えれば郷里と文学に分裂した自己に拘泥することにほかならない。その二律背反を止揚する道は郷里自体を「東京」の目で眺め返すことであるかもしれない。あるいは「東京」における自己を郷里の目で眺めてみることであるかもしれない。郷里の感覚と思考を人は生活人の目、庶民の目、常民の目等という。しかし、生活人は生活人に留まる限り、「目」にはなり得ないのであって、生活人を超えた作家の目を生活人の中にくぐり抜けさせることによって、いわば複眼の視点に立つことによって生活人の目は作品に定着されるわけである。

井伏における郷里の世界観を「言葉」の上から破っていったものにあの泥棒体験があったことはよく知られている。「私の初めてきいた東京弁は、『戸を明けろ』とか『文句を云はねえで明けろ』といふ物騒な言葉である。」と『雞肋集』は伝えている。この幼児期の強盗事件が井伏と東京語との初めての出会いであった。その後、彼は「中学を卒業し、その年の九月、初めて上京するときには、自分も一日も早く東京弁を使いこなせるようになりたいと思っていた。」（『半生記』）と書いている。しかし、彼は続いて「東京弁のことなんぞ、もうどうだつてよい。蛙の子は蛙じゃ」とも考える。彼に東京弁に対するコンプレックスはない。逆に、東京弁に接した体験が郷里の言葉と感覚に対する見なおしを彼に迫ったのではないか。その価値を彼に再認識させたのではなからうか。

「シグレ島叙景」（昭和四年十一月「文芸春秋」）は「陸地から十五町も離れてゐて、周囲三十三町の一箇の島嶼」が舞台であるが、井伏の「言葉」に対する考察が満ち満ちている小説であると読みとれる。

「この島には、たつた二人の住民と四百びきの兎とがある。」宮地伊作と村上オタニの二人である。島の一日は「半鐘」から始まる。

毎朝、一ばん先に起きたものが櫓の半鐘を鳴らすのである。

半鐘の音は、その鳴らしかたに一定の規約が設けてなかつたので、秩序なく且つ甲高く鳴り響いた。その音は他の多くの島や岬に反響して、シグレ島は、他の島々と朝の挨拶を交してゐるらしかつた。眠りから目をさましたての兎達は、立ちどまつたり耳をそばだてたりして、さうして彼等は、半鐘の音と向うの島からきこえる木精とに対して、交互に耳を動かした。

ここでは「半鐘」というやや原始的で素朴な音が「挨拶」であるという「言葉」の風景がみられる。またそれは人間と動物たちをつなぐ「言葉」としての役割をも担っている。

さて、伊作とオタツはよく口論する。その口論の実際は長くなるので引用できないが、とても論理的とは言えなくて、兎を売れ売らぬの周囲を限りなく堂々めぐりするばかりである。そして、次のように説明される。

彼等二人は口論するとき以外には、決して長たらしく話し込むことはなかつた。彼等にとつては、言葉といふものは口論するためにだけ存在したことになる。さらに次のようにも述べられる。

彼等二人が論争をしない場合には、彼等はお互い絶対の沈黙をつづけ、若し何かの必要があつて二人が会話をしなければならぬ場合には、彼等はこれを口論

の形式でなしとげた。万一にも、彼等が相手に対して隣人同志の愛情を示さうとする場合には、彼等は絶対以上の沈黙を守つたのみでなく、お互に顔を反け合つて深い嘆息ばかりをもらしたのである。

この二人の「言葉」の世界が貧しいとか不自由であるという批評は当たらない。彼らにとってその世界はまったく完璧なものであるばかりか、逆に多くの余計な言葉を費し、「口論」とは逆のお愛想の言葉をふりまかなければ交流をなしえない都会人の方が不自由なのである。都会人は「愛情」表現にも「言葉」の選択を必要とするだろうが、ここでは「沈黙」と「嘆息」だけでこと足りるのである。このように円満具足した「言葉」の宇宙に東京弁が入りこむとどうなるか、たちまち彼らは拒否反応を起こしてしまふのである。

▲村上オタツは、私と五分間以上も会話を交へてゐると、必ずヒステリーの発作にかかる慣はしなのである。彼女の告白によれば、私のつかふ東京言葉は彼女には刺戟が強すぎるのだといふ。髭剃用クリームやシャボンの香も、屢々彼女に同様の発作を起させた。

言葉は感覚にとって「もの」であり異質の「もの」の侵入を強靱に排除しようとすることは彼女自身の言葉の宇宙を守ろうとする行為でもある。それは「人間はどこに住まつたればとて、得心ゆくものではなかるまいでせうかな？」という伊作の理論に支えられて己れよって立つ宇宙を堅持する思想である。

井伏も自己自身の文学世界の確立によって己れの宇宙を造型しなければならなかつたが、まだその道を見出しかねていた。

「岬の風景」の「私」の心象はやはり「憂鬱」に閉ざされているが、その「私」を襲うものは世界に対する「おびえ」の感覚であった。「私」は百貫島の燈台の灯がみえる岬の南端に位する小都会の対山館にいて、時には「よくない外泊」をしたりして「鬱」を慰めている。

▲何の身よりもなく譴責する人もないこの田舎に迷ひ込んで来てまで、私は斯ういふ日常を肯定しようとしたか？

——私は夜更けの窓を明けて海を見ながら、暗澹として且つ旧式な自分の生活を嘲笑したことが屢であったのだ。その時私は必ず黒くうづくまる島の上に、おそいぶざまな月を見たが、私にとつては月は一箇の赤くただれた片目であつた。私はおびえた。真赤な片目は空に浮びあがつて、醒い光りをもつて私をにらんでゐるのだ。私はいそいで窓を閉め、それから寝床に入るのであるけれど彼は私の閉ぢた目の中へまで現れて来る。

「早く夜が明けてくれればいいのだ……」
私は私を睨んでゐる彼へ唾をはきかける真似をしたり、両手をふつてそれを感しつけたりした。▽

ここには月に対する異常ともいえるおびえと敵対意識がある。井伏の夜が明けない限り、この外界に対するおびえと敵対感ほ消えないのだから。外界に対する親和性の強い井伏文学にとってこういう感覚は珍しいといえるのかもしれない。月を「赤くただれた目」と感じる感覚は萩原朔太郎の病的な世界や梶井基次郎の幻視世界にも通じている。これによって当時の井伏のおかれていた「憂鬱」の深さと孤立感を推察することができる。孤立した魂は世界をおびえの感覚で受取る。その魂はまだ「暗澹」とした「暗さ」の中におかれてゐる。『夜ふけと梅の花』は後の井伏と比較して特にこの魂の「暗さ」において印象づけられる。

なぜ「私」は「月」におびえたりするのであるうか。「月」は文学士志望の「私」を譴責する「父兄達」の象徴なのだろうか。それは次のような現れ方もする。
▲驚いたことには、麦の穂かけに一箇の赤い光りがきらめいてゐたのである。私はいびつな月だと知るより前に、すくみあがつてしまった。ところが彼も、同じく麦の穂におどりあがつて再びすくみ身をばせた。だが彼は確かに私の後をつけてゐたのにちがひない。

私は明らかに見とどけたのだ。彼は赤くただれた一箇の醜い片目であつた。▽
この後「私」は「月」と口論する。

▲「俺は平気だぞ、何も俺は悪いことはない」
「いや、貴様は悪いやつだぞ」▽

この「悪いやつ」という言葉は直接的には作品中の「みち子」との密会と恋愛を意識して言われているが、広くは「私」の生活全体を意識して言われている。ここにみられるのは「私」が自分の生き方ならびに生活を犯罪的なおびえの意識でとらえているということである。それが「ただれた片目」の形をとって彼を脅かすとすれば、「私」の心にあるものは自虐の意識でもある。この犯罪者意識と自虐性は「私」が世間的な意味での「生活」を始めていないところからくることはいふまでもない。「学生時代と少しも交らない様式の生活」は「生活」とは言われないのである。

この作品の結末に出現する虹は「私」が「憂鬱」から脱出する希望の徴候を象徴するかにみえる。

▲殆んど信じられないくらいの大な虹が、病院や麦畑の真上から中空高く、強

い色彩の橋を沖合の島の上まではるかに架けてゐるのだ。恰もその島の上まで、くつたした私の思想をうつちやつてしまふべく歩いて行けといはんばかりに、虹ははつきりと巨大な姿で空にかかつてゐるのである。私は一刻も早くその虹の立ちのぼつてゐる病院や麦畑のところまで走つて行かうとした。▽
しかし、やがて「私」はこのような美しい虹からさえ自分が拒まれてゐることを感じてしまふのである。

▲私の立つてゐるところから見れば、彼女等こそ巨大な虹彩に埋められ、空を指しながら手をつないで、其の色彩ある橋を渡つて行かうとしてゐるかのやうに見えたのだ。

私はこれ等のすばらしい光景に感動の瞳を向けながら、私こそ彼女等のはがらかさを汚すものであることを考へた。▽

虹と「彼女等」(賄の娘とみち子)が▲美▽の世界に属するのに対し、「私」はあくまで▲醜▽の世界に留まつてゐる。そして「私」にはむしろ「真赤な片目」「ぬらぬらと空に浮び出る彼」の方がふさわしいとも考へるのである。自らを「汚れ」と意識する自意識こそ当時の井伏をとらえた「暗い」心象を示してゐる。

早稲田の文科の時の級友であり、今は旅検師を営んでいる佐竹小一との交友を描いた「寒山拾得」も決して明るい作品ではない。「私」が「彼のこの暗澹として且つ風雅な生活を羨」むのは、「彼の職業が私のより、何よりもまづ風変わりであつたから」なのだが「彼」は「芸術とか美術とかに結びつけて」模写本の製作を考へてゐるわけでもない。しかし、「彼」は寒山拾得の笑いをみて「全く超脱した笑ひ顔」をそこに認め、製作欲をおこすのである。

二人は夜になつて情熱的に飲み且つ饜舌り、泥酔者と交した末に、寒山拾得の笑い声を模倣して笑い合う。お互いに相手の笑いに對し、それでは駄目だと批判しあいながら「げらげらげら、げらげらッ」といつまでも笑いの競争を続けるのである。往來のポストに寒山拾得の絵をはりつけながら、雨の中をひたすらに笑い合うことに熱中する二人の姿は何を意味してゐるのであるうか。彼ら二人が「生活」者の側からのアウトサイダーであることはいふまでもなからう。一方でしかし「芸術」の世界にゐるともいえず、あくまで「文科の予科の時」の情熱の余蘊をもてあましてゐるのみである。寒山拾得が彼らの理想の象徴であるとして、「もうすこし風韻と枯淡味とが出なくては駄目だ」とか言いながらその笑いを模倣しようとする二人は自らのグロテスクを意識しながら笑いを止めない。それは彼ら

自身を嘲笑する自嘲であるとも絶望の表現であるとも思われるような笑いである。この笑いは暗い夜の空にいかにも陰鬱に木精したに違いない。

「夜ふけと梅の花」(大正十四年「鉄鏈」)の「私」も「ひどく空腹で且つつかくした気持で」歩いてゐる。そして友人田和安夫から「そんな便利左官のやうな暮しをしてゐては駄目だぞ。もつとも職業は何でもいゝが、気持がぢぢむさくなつては駄目だぞ。未来に突入するんだ。明るくなれ明るく」と言われたり、「きみは、世の中から強迫されてるぞ。俺がひとつ霊(たまし)を入れ換へてやる。明るくなれよ。明るく」と言われたりしている。

△或る時の如きは、紅絹の裏についた女の羽織を何処からか持つて来てくれて、彼はその裏を出して、私の部屋の帽子掛けにかけた。さうすれば、少くも気持が明るくなるだらうといふのであつた。▽

「私」の気持ちの「暗さ」もさることながらこの作品では何ものかの「強迫」感が印象深い。それは友人の言うごとく「世の中から」の「強迫」であるかも知れないが、そのおびえは「岬の風景」における「赤くただれた片目」に対するおびえにも通じてゐる。それは「私」に対して「全く突然」血だらけの顔を電信柱のかげから現わす村山十吉のように「私」を恐怖させるのである。

△いつ何時村山十吉に出逢ひはしないだらうかと最もおそれた。彼はいきなり背後から私の首すぢを締めつけるかもわからなかつた。▽

この「おそれ」が一つには経済的貧窮による生活不安からきていることはいうまでもない。しかし、それ以上にもっと根源的な人間存在の拠つて立つ地盤の不安定感にもとづく実存的な「おそれ」の様相をもそれはおびえている。それはいつ何時どんなことが起るかかわらないという予測不能の恐怖であり、その「恐怖」はやはり「私」自身の「罪」意識に由来している。村山十吉が仕入れ物の買入れ金を持って失踪したことを知った時、「私」は次のように思う。

△最早何んなことがあつても、私は村山十吉がおそろしくはないと思つた。彼は私以上にはつきりした罪人でさへあるのだ。▽

ここで「私以上に」というのは「私」が村山十吉の五円紙幣を返さないままでいるということにもとづくことは勿論だろうが、そのことを除いてもやはり「私」は現在の自分に「罪」意識をどこかに感じながら生きてゐるのではなからうか。だからこそ一人で限りなく泥酔しながら「酔へば酔ふほど、俺はしつかりするんだ」と強がりを書いて迫りくる恐怖感と戦つてゐるのである。

「一匹きの蜜蜂」は「朽助のゐる谷間」と同じく郷里を代表する人物谷本朽助

が登場し、彼と東京生活を送る「私」との往復書簡の体裁をとつてゐる。養蜂場の番人をしてゐる朽助は「私」に蜜蜂の巣を小包で送つてくる。「私」は手紙の中に次のように書く。

△唯今の小生にとつてはどうも蜂に関する話は切実に教訓的であるので譬へば、蜂はその持主が怠けがちであつたのにもかかわらず、このやうに芳くはしき蜜を熱心に集めたなどといふ話は、あまり實際的に小生を鞭打ちますので、少し心苦しくなつてゐます▽

「私」の経済生活は朽助の農業経営によって支えられてゐるらしい。ここで「蜂」たちの労働は朽助を代表とする郷里の働く意識を表象し、「私」は自らの怠慢な生活をそれに比べて慚愧するのである。「私」の東京生活は朽助にとつては「貴殿は近頃恬として廢類なされた」と映るのである。朽助は「私」に対し、△入院したとか申されたのや自費出版すると申されたのが、みんな嘘であると申されるのは、よくせきの廢類ならずば白状できぬものでありませうぞ。▽と述べ、「私」を叱責する。そして、「およそ人たるものはおのが暮しを手車に乗せてごころごとく押して歩まねばならぬやうなものなり」と説諭するのである。

この朽助と「私」の書簡による対話はその内容的違いを超えて中野重治の「村の家」を連想させるところがある。孫蔵の「転向と聞いた時にや、お母さんでも尻餅ついて仰天したんじや。すべて遊びじやがいでして。遊戯じや。尻をひつたも同然じやないかいして」という非難は確固たる生活者の立場から文筆を弄ぶ者に向けられるが、「私」もまた農業か文筆かに悩んでいないわけではない。

△小生も確固たる信念を得ましたならば、何時にても御地に帰耕作と副業とに従事いたしたく、ご存じの如くこの考へは幼時よりの計画であります。たゞたゞ絶望失意のまゝにて当地を逃亡することは、何としてもいたしかねることであります。▽

これは「やはり書いて行きたいと思ひます。」という勉次の答えに通じる文学的覚悟の表明であろう。やがて一匹の蜜蜂が送られてきた巣の中にまぎれこんでいたのが発見されると、「私」はこの「蜂」の中に己れ自身を認めざるを得ない気分になる。

△彼は最早労働に出かけて行かうとする精神は忘れて、巣のまはりをおらつてばかりあります。このやうなルンペンを見てゐることは、私自身の胸甲塗なさ指摘されるやうに頼みられて、私は思ひきつてこいつ(この蜂)をたたきつぶしてやらうかと思ひます。▽

▲今日では、私は自分のやくぎがたまらなくなつてゐるからです▼

しかし、「蜜蜂」を殺しても「私」の「ルンペン」、「私」の「やくぎ」が直るわけではない。「私」は「私自身」から「この昆虫の態度に似たもの」を除ききる以外に道はないことを覚る。だが、ある日、蜜蜂は死ぬ。痛快がる「私」に対し、朽助は批難する。

▲貴殿は、今回のやうな横死を遂げた蜜蜂のやうに貴殿自らがいくぢないと申されますならば、何故に蜜蜂のいくぢないのを素つ気なくなさるお心にて、ご自分を打ち懲らさうとはなさらなんだか。貴殿のお考へは、どういたしても遊びごとのやうに思はれて、合点が行かんです。▼

この朽助の叱責は「すべて遊びじやがいて。」という孫蔵の叱責とほとんど等価の重みをもって文筆者に迫ってくる。しかし、孫蔵と朽助の違いは前者があくまで筆を捨てよと迫るのに対し、後者は「私」の道を歩めと最終的には鞭撻していることである。朽助は「私」にとってまことによき師であった。▲蜜蜂のいなげな蠢しかたを素つ気なくなさる心にて、存分に人と人とのなかに出て行きなされてよろしと考見申します。どういふことが間違ひないことかは、人と人が同じ人間でなければ、わかるものではないと思召された。愚者もともにありとや申すことは、ご存じの通りと存じ奉ります。めくつてみたるのがスピードならば、それはスピードでよろしいです。それでありますからして、スピードが出たらスピードだと思召しさへすればよろしいです。前もつてしてわかる仕儀ではあらず、道はいづくにか隠れて真偽ある、言はいづくにか存して可ならざるとや申すではありませんんだか。▼

「文学」の道が「スピード」の道ならそれはそれで「スピード」に徹するといふことであろうか。とにかくここには従来の井伏の迷いと暗さを脱却する一つの示唆的な道が暗示されているような気がする。「スピードでもよろしい」という覚悟でこれからの井伏は歩んでゆくのであろう。間違ひのない生き方というものはないのだ。人が各々違う価値観を抱いて生きている限り、真偽は容易にきめられるものではない。己れは己れ自身の道、信ずる道を胸をはって進め、くつたく悩まされずにと、そう朽助は言っているようにみえる。

その意味で総体において暗かった『夜ふけと梅の花』が、こういう結末をもつ「一びきの蜜蜂」で終わっているのは意味の深いことだと思われる。

『なつかしき現実』は「新鋭文学叢書」の一冊として昭和五年七月三日に改造社から発行された。「谷間」という中篇小説が巻頭に置かれ、次に十篇の「挿話

・小品」そして六篇の短篇が収められている。

「谷間」のみをみても『夜ふけと梅の花』と比べてかなり明るいタッチが感じられる。

「谷間」は姫谷焼発堀のため姫谷村を訪れた「私」が隣村との争いに巻きこまれるという話である。「私」はこの戦いの指揮者をひきうける代わりに争い自体を運動会として遊びに切りかえてしまうというユーモラスな場面が展開される。

「私」と隣村との少女との淡い恋に似たものも描かれ、物語的な雰囲気が出てくる。この中篇はおそらく井伏の後の小説との関連で言えば、歴史物の手法をとった最初の作品といえるのではなからうか。もちろん、時代は現代ではあるがその村どうしの争いの場面の描写には「さざなみ軍記」等の萌芽に似た要素が感じられる。ともかく物語的結構を備えている点において『夜ふけと梅の花』の中のどの短篇にもなかった手法が感じられる。この小説が明るい印象を与えるのは例えば少女の母の嘍り方を次のように描いていることでもわかると思う。

▲それは難解な田舎言葉の唱歌にすぎなかつたが、私はまだ一度もかういふ朗らかな内容をもつてゐる人間生活の讃歌をきいたことがない。私は深く頭をたれてその讃歌をきゝのがすまいとしてゐたのである。▼

ここにはすでに「くつたく」はなく、明るく楽天的な庶民の生き方に敬虔に学ぼうとする態度が認められるといえよう。

(参考文献)

松本鶴雄著「井伏鱒二論」(冬樹社刊)その他多数。

(了)